

離島深島に生きる

## 「清水禎一翁」聞き書き(一)

矢野 徳 弥

(会員 本匠村大字字津々)

一 はじめに

今年の七月、私たち佐伯史談会の会員九人は、島の自然や歴史を探るため蒲江町の深島を訪問した。そのとき案内の役を勤められたのが、この島の長老清水禎一さんである。清水さんの話を聞いて驚いたことは、島の歴史を語るその視点の確かさと、植物や動物にまで及ぶ知識の広さであった。厳しい条件の離島にあつて、どうしてそのような教養を身につけたのか、とても不思議に感じられた。それを知ったのは、二度目の訪問を終えてからのことである。

深島探訪からしばらくしたころ、突然会誌の担当から訪問記を書くようにと依頼があり、予想していなかったためずいぶんと狼狽した。その後深島に関する資料を集

めていろいろと検討したが、まとまった構想は浮かんでこない。原因はやはり取材不足であった。

意を決した私は、台風13号の余波も治まった八月二十二日、再び深島に清水さんを訪ね、帰宅後、そのときの話を土台として、これを聞き書きの形でまとめて見ることにした。

それが、これから記すところの「清水翁語り書き」である。

### 二 わが古里、深島

私は清水禎一と申します。大正九年の生まれで、今年八月喜寿を迎えました。五歳のとき父母に連れられてこの島に移り、戦前・戦中の一時期、店勤め、兵役などで島を離れましたが、昭和二十四年に再び島に戻り、それからずっとここで暮らしております。

ご承知のことと思いますが、この島は、本土の蒲江港から九き離れた日向灘に浮かぶ、東西約一・二き、南北約一・五き、面積一・〇き平方の小さな島です。

このため人が住む条件はなかなか厳しく、経済情勢の移り変わりで人口の減少も大きく、私たちが小学校に入っ

たころは、島の人だけでも二百人を越えていたのに、いまは竹屋に五軒、因尾谷に十軒残る家に、わずか三十八人が住むだけとなりました。

しかし、私はこんな情勢にもへこたれず、まだまだ頑張ろうと思っています。そのため、子供がいなくなつて休校している学校も、来年から孫が一人学齢に達するので、ぜひとも開校するよう、当局に求めております。

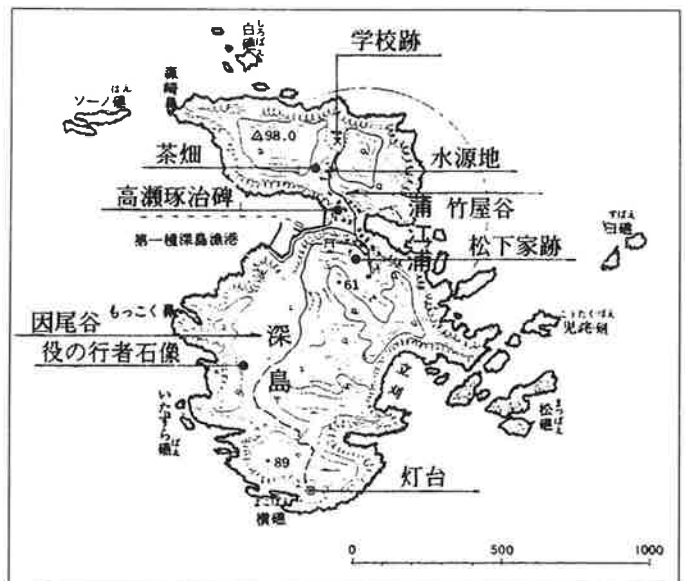
### 三 深島の昔（幕藩のころ）

まず、深島の昔の歴史から入りましょう。

深島はこれまで何度も人が居着いたり、居なくなつたりしています。そして一言で言えば、私たち浦の人よりも、むしろ奥村の人たち（それも大部分が、いまの直川村の人たち）にまつわる、不幸な歴史の繰り返しであったように思われます。

#### （深島開拓のはじまり）

はじめて深島に人が居着いたのは、藩の政策による移民からと言われます。残されて居る資料によりますと、深島には長い間人は住んでおらず、たまたま漁師たちが舟を寄せて、網を干す程度のことであつたと言います。



しかし、地形から考えて、開拓すれば人が住めると判断した藩が、享保六年（一七二二）に移民を募り、これに応じた赤木村の百姓四人（家族を含め十六人）を送り

込んだのが、始まりとされています。

なお、このとき地元蒲江から応募者がなかったのは、漁を認めないとする藩の方針を嫌ったものでしょう。

畑地だけに頼る四人の生活は、かなり苦しかったに違いないと想像されますが、屋形島に移されるまでの二年間、ともかく人が住める場所であることを教えてくれました。

#### (逃散農民の受け入れ)

寛保年間(一七四一〜四三)山間の村々では凶作が続き、年貢の滞納に苦しむ農民が、大勢他領に逃散する事件が次々と起こりました。なかでも同三年二月、赤木村から延岡領へ十一人、高鍋領へ四人逃げた事件で、いったん事が治まった後の、家族を含む六十九人の受け入れ先が問題となりました。藩は蒲江まで舟で連れ戻したものの、赤木村に帰すことは許さず、前々からいた四家族は屋形島に移し、これを深島に送り込んだのでした。

そして間もなく、今度は岡領に逃散した下野村の四人が送られて来ましたが、畑地に限りがあると考えたのか、赤木村の農民のうち十人は、入津浦、米水津浦などに移し替えられています。

こうしてまず深島は、逃散農民の所替えの場所として使われるようになりましたが、多くの農民を定着させることは難しく、領内の農民を慰撫する必要も考えたのでしようか、十年ばかり経ったころから漸次帰郷を許し、島の住民もつぎつぎと去って行きました。

ただ、そのとき許されなかったのか、あるいは新しく送り込まれていたのか、寛政十年(一七九八)一人の囚人が、魚の加工に使う桶を使って島抜けを図り、保戸島に向かう途中を発見されて、ほどなく斬罪になったという、悲しい話も伝わっております。

その後、まったく人がいなくなつたかどうかは、分かっておりません。

#### (流刑の場所となる)

それから六十年が経過しました。今度は前よりも重い刑罰、流刑の場所として島が使われるようになり、文化九年(一八一二)奥村で起きた農民一揆で罰せられた因尾村の農民五人と、仁田原村の農民一人が、ここに流されて来ました。所替えの農民には、島の周辺で多少の魚介類を取ることが黙認されていたが、流刑の農民には、磯で小魚を取ることさえ禁じられていたと聞いておりま

す。島の中央部にあるかつての開拓台地上がると、あちこちに当時を物語る古い墓石や、因尾谷などの地名とともに、茶畑の跡なども残っています。

この流人たちの最後はどうなったことでしょう。多くの人は許されてあるいは所替えとなり、あるいは帰郷したと伝えられています。己の悲運を嘆きながら、だれに看取られることもなくこの地で果てた人も、あつたに違いありません。

(最後の所替え)

一八六八年、徳川三百年の幕藩体制は崩れ、新しく明治の新政権が発足して、翌年には版籍の奉還も行われたとはいえ、統治の仕組みはなお以前のままでした。このとき奥村で、農民一揆の動きが発覚しました。

政権交代期の混乱に乗じ、永年の圧制に苦しめられた農民たちが、県下各地で蜂起しました。その中で岡藩の騒動は規模が大きく、同藩の宇目郷と隣り合わせの奥村(主として現在の直川村の地域)にも同調する動きが出て来ました。新政権下で佐伯藩が受けた衝撃は大きかったと思われませんが、その対応の仕方は旧態依然たるものでした。

大勢の農民が集まり、村役人になにがしかの要求を突き付けたという段階でいち早く関係者を捕らえ、翌三年三月、首謀者と見られる九人を深島に所替えする処分を行いました。

島にはまた人が住むようになりましたが、その人たちの生活については、何の記録も残されておりません。

しかし、藩政の改革も進み、旧制度による処分の不当さに気付いたのでしょうか、翌四年二月になり「別儀の御慈悲をもつて」と称し、全員の帰郷を許しています。

深島はこれによりようやく、百五十年に及ぶ忌まわしい歴史に、一つの区切りをつけました。

#### 四 新しい歴史の始まり

(松下家の移住)

深島の新しい歴史は、松下家の移住に始まりました。

明治四年七月、廃藩置県により佐伯県が生まれ、やがて大きく小県を統合して大分県となりましたが、人のいない県境の深島が、宮崎県となることを恐れ、大区の蒲江浦用務所を通じ、地元住民を島に送り込む計画を立てました。

これに先ず応じたのが松下初蔵さんでした。松下さんは、蒲江浦のしかとした百姓で、他所に移る理由など何もない人ですから、恐らく島の先駆者となる意気込みで移住を決めたものでしょう。このとき役所から「土地に閑するある種の優待条件を記した一筆」が与えられたといいますが、それが実行されたという証拠はありません。

翌五年、松下一家は深島に移住し、家族七人だけの厳しい生活が始められました。

そのときの話がひとつ残っています。

——あるとき、時化を避けて立ち寄った猪申の船が、誰もいないはずの島で人の泣き声があるので、驚いて浜辺を探したところ、山陰に苦が掛けられていて、その中に弱り切った二人の子供がいるのを見つけた。すぐさま船に連れて行き、食事を与えて看病したところ、だんだん元気になり、「父ちゃんも母ちゃんも本土にいつたまま帰って来ぬ」という。初蔵さん夫婦は島で取れた魚をもつて、他の食べ物と交換するため、向こうの波止津に渡ったまま、海が荒れて何日も帰れなくなっていたのだった。——

もしもこのとき、猪申の船が寄らなかつたら、子供た

ちの命はどうなっていたことでしょう。まったく恐ろしい話でした。そのとき時化の海に遠く引き離された親子の心中を思えば、いまだに言葉がつながりません。

松下さん一家が移住した後、蒲江浦周辺から次々と人が移り、やがて分家や新たな縁組などを通じていくつかの血族も生まれ、島の家数も人口も増加して、ぼけ網（棒受け網）の漁師として色利あたりから来ていた人を入れると、最盛期には三百人も人がこの島に住むようになりました。

## 五 清水家の深島移住

先ず私の家のことから始めましょう。

私の祖父は竹野浦の出身で、大正に入ってから熊本県五木村の銅山に勤めるかたわら、家でも小さな旅館を経営しておりました。子供がないので私の父福松を養子に迎え、ところの娘美須恵と結婚させて、やがて二人には（後継ぎ）（長兄）も生まれました。しばらくは月並みの、平和で幸せな生活が続いていたようです。

ところが、世界を巻き込んだ欧州の大戦も終わり、景気の先き行に陰りが見え始めた大正九年、突然銅山が閉

鎖されることとなりました。

仕事を失った一家は、余儀なく五木の家をたたみ、古里の蒲江に引き揚げて来ました。そのとき私は、母親のおなかの中にいました。

(父の事業の失敗)

蒲江に帰ってから、父はしばらくして鮮魚商を始めました。幸い商売は順調で取引高も年々大きくなり、後には魚の加工も行うようになりました。

そのころ深島周辺はカツオ・マグロの好い漁場で、こ



石像の行者役

こで取れた魚を買い上げ、都合よく他所の市場に送るとかなりの収益がありました。しかし、冷蔵技術の進んでいなかった当時、保存の利かない鮮魚の取引には大変な危険が伴っていました。父はそれに失敗したのです。

大正十三年のある日、

島の近くで大きな水揚げがあり、父は同業者三人と共同でこれを買収しました。大きな利益を期待してのことでした。魚はそのころ愛媛の宇和島を起点に、佐伯、蒲江に寄港し、宮崎の古江を終点とする「宇和島丸」の帰り便に積む手配をしていました。ところが古江の港に入った後、海が荒れて何日も出港できず、このため買い付けた八千円分の魚すべてを腐らせてしまったのです。

一家はそのとき持ち分の二千元という巨額の損失を抱え込み、資金繰りに困ってほどなく倒産しました。農家の手伝い賃金が五十銭、土工でも八十銭から一円、良いといわれた教員の月給でさえ三・四十円という時代のことでです。

(深島に移住)

まったく途方に暮れました。しかし、いつまで失敗を悔いていても事は解決しません。一家は生き延びるため、嫁に行っていた叔母を頼り、深島に渡って百姓をする決意を固めました。

前にも話したとおり、ここは藩政時代流刑の島で、年貢もない番外地でしたから、戦後の農地改革が行われるまで、島全部が公有地とされ、明治二十一年以来ずっと

蒲江の町有地となっていました。そのため所有権は認められないが、開墾は自由とされていたのです。

蒲江には祖父・祖母を残し、父母、兄、姉、五歳になった私、そして幼い妹の六人で、押し船を漕いで島に渡りました。

島に着いてみると、そこには三・四十軒の建物があり、色利・蒲江・猪串・森崎などから季節の漁に来た人もいて、かれこれ三百人近い人がいました。(多少の記憶違いがあるかもしれない)

※大分県の統計によると、大正十三年当時、深島には、二十三戸、百六十四人がいたとある。

たいていの家が、百姓をするかたわら島に来るほけ網の舟子をしており、どっかと地に根を下ろし、したたかに生きておりました。この中で早くから島に移住した松下・阿部・川野・後藤といった人たちが、強力な基盤を築き、また木許・白岩といった人たちも力を持っておりました。百姓が目的でこの島に渡ったのは、恐らく私たちの一家が最後だったでしょう。浦はなかなか同族意識の強いところで、後入りが島の一員として認められるまでには、大変な苦勞と時間を必要としました。

付図(1)

深島の世帯数及び人口の変遷

年次	世帯数	人口	摘要
明治 13 年	3	9	大分県統計書
20 年	11	48	〃
30 年	12	65	〃
大正 7 年	18	154	〃
13 年	23	164	〃
昭和 1 年	23	172	〃
10 年	31	198	〃
40 年	33	139	大分県統計年鑑
平成 9 年	15	38	聞き取り

(昭和44年「統計で見た大分県」による)

狭い島のことで、農耕に適した土地はほとんど開墾されていたので、一家は山地の傾斜のゆるやかな場所を探し、竹やぶを切り開き、しぶとく張り巡らされた根っこを取り除き、一枚一枚畑に仕上げて行きました。その中には五十枚合わせてやつと二反歩という場所もありましたが、必死の努力で八反歩の畑を開き、ここに芋や麦を植え、辛うじて糊口を凌ぐことになりました。

そのころ島全体で十五、六町歩の耕地があったといえます。帳簿では畑は七町八反歩ということですが、それはまともな畑のことで、とにかく潮風の被害の少ない場所、ものが植えられさえすれば、必ず何かは作っておりました。耕地は、塩害を受けやすい竹屋には少なく、主に因尾谷に集中しておりました。

※明治二十一年、土地台帳が整理されたとき、深島の畑は、七町七反五畝余歩とあり、この数字は現在も変わっていない。

島は百姓だけでは食えません。それかといって漁業権がないので、仕方なく島にくる「ぼけ網」（正式には棒受け網）の舟子となり、稼ぎの足しにしていました。

ぼけ網は蒲江一帯で終戦のころまで盛んに行われた漁

法で、旧暦の盆過ぎから十月いっぱいまで、主にサバ・イワシを捕っていました。深島周辺はなかなか好い漁場で、島の人たちはここにくる七統ほどの網の舟子になっておりました。なにしろ網一統に十人は要りますから、島だけでは足らずよそからも大勢来ていたようです。

賃金での支払いはなく、水揚げ毎に親方が六、舟子が四の割合で分配し、それぞれ加工して製品にしました。だから他所から来た舟子も、居家と加工場を兼ねた建物が要りました。そのあとですが、製品はまた親方を通して売ったので、うまみの少ない仕事でした。

（小学校のころ）

島に移って二年目の春、私は小学校に入りました。同級生は六人、校舎は今の教員住宅のところにあり、生徒は全員で四十八人、一年生も六年生も同じ教室、先生は一人で、初めが肝心だからといって、もっぱら一・二年生に力を入れて教えました。それから上は芋こねと同じで、上下入り交じって勉強するうちに、いつの間にか知恵も付いたので、後に蒲江の高等小学校に進学しました。が、さして困らなかつたことを覚えています。

このときの先生は渡辺久米蔵といい、教育者として実





清水さん語るについて深島の歴史

に優れた人物でした。私はかねてから、その道の人に頼み、先生の事績を詳しく調べて顕彰してもらいたいと、強く願っております。

そのころはどこの家でも、みんなが手分けして一家を支えており、学校から帰ると、仕事の手伝いが待っていました。島には十二頭ほど牛が飼われていて、大きい子

供はその秣刈り、ほかの子供はたいてい豚の世話させられました。畑仕事にもよく出ました。

二年生の時のことです。妹を背負い、母とともに芋の蔓返しに行きました。暑い一日で、母はずいぶん疲れておりました。「むげしねえ、母ちゃんぼつぼつやれ、やりつけち死ん

でもうぞ、俺いそん分はりこむきい、よこいよこいやってえ」と話したら、母は泣いて座り込んでしまったことがあります。他愛のない話なのに、そのときのこと妙に頭に残り、いつまでも忘れることができません。

しかし、手伝いばかりではありません。学校から帰ると、すぐ海に飛び込み魚を捕ったり、潜ったり、山に行つてはシイの実・グミの実・アケビ・山イチゴなどを採り、また、トンボを追ったり、蛙をいじめたり、けっこう楽しく遊んだものでした。

毎年、正月九日と九月九日は明神様のお祭りでしたが、大人が集まって酒を飲むばかりで、神主も来なければ、歌やおどりもありません。まだ伝統が浅かったせいでしょうか。

こうして私の小学校生活は終わりました。

(高等小学校に入学)

家には弟や妹が何人もいたが、島に渡って八年、母が豆腐を売って貯めたお金で、高等小学校に入れてやるといわれ、それから蒲江の叔母の家に移って、ここから学校に通いました。先輩が一人いたが途中でやめたので、島からの進学は私が最初となりました。母の熱い期待に

応えるため、それはもう真剣に勉強したものです。

(島を離れる)

昭和十年、高等小学校を卒業した私は、島には帰らず、いや島には行かず(島の人はいまでも、蒲江に行くことを「帰る」といい、島に戻ることを「行く」という。)東光寺の和尚の世話で、神戸の「播新」という大きな店で働くことになりました。

これから島とはあまり関係がないので、くわしく語ることは避けましょう。

「播新」は当時日本で三つの指に数えられる大きな古美術商で、お客は上流階級の人が多く、取り扱う品も一流の物ばかりでした。私はもつぱら茶碗を扱わせられましたが、少し分りかかったと思われるころ召集令状が来ました。この店には二十三歳までおりました。

昭和十六年の春、私は熊本の野砲兵連隊に入隊し、ほどなく軍の命令で満州のハイラルに移り、国境警備の任に就いておりましたが、二十年八月の終戦により、シベリアに送られ、四年間の抑留生活を経た後、二十四年十月二十八日に、舞鶴に上陸して復員しました。

十六年ぶりに島に帰ってみると、そこには長兄の戦死

という悲しい現実が、待ち構えており、否応なしに島で生きる道を探さねばならなくなりました。

苦難に満ちた私の第二の人生は、ここから新しく始まります。(以下次号)

## 付記

この「語り書き」の作成に当たっては、資料・取材の両面で、会員林 寅喜氏に協力をいただきました。なお、次の文献を参考に使用しました。

蒲江町史 昭・五二 蒲江町教育委員会

直川村誌 平・九 直川村誌編さん委員会

深島を船でたずねる会資料 昭・四八 佐伯史談会

屋形島・深島実態調査報告書

昭・五五 大分県離島振興協議会

統計で見た大分県 昭・四四 大分県企画部

日本の歴史をよみなおす 網野善彦 筑摩書房